様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年３月３１日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２５２０３５２

研究課題名（和文）　国境と跨境が取り結ぶ文学の可能性――モンゴル系諸民族の近代文学の再検討

研究課題名（英文）　Potentialities of Mongolian Literature within and beyond borders : Reconsideration of the Modern Literature of the Mongols

研究代表者
岡田　和行（OKADA KAZUYUKI）
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号：70143617

研究成果の概要（和文）：本研究は、モンゴル系諸民族の居住するモンゴル国、中国内モンゴル自治区、ロシア連邦ブリヤート共和国およびカルムイク共和国などの各地域の近代文学の成立過程、国家により形成された個別性、国境を越えた共通性、さらに文学作品や人的交流による相互影響などを再検討し、国家単位で編成された文学ではなく、国境を越えた民族横断的な文学の比較・統合を試み、モンゴル近代文学研究に新たな視点を提供しようとするものである。

研究成果の概要（英文）：Reconsidering the formation of modern literature in Mongolia, Inner Mongolia, Buryatia and Kalmykia, we examined the supra-national literariness of Mongolian literature, and brought to light potentialities of Mongolian literature within and beyond borders.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	1,300,000	390,000	1,690,000
２０１１年度	900,000	270,000	1,170,000
２０１２年度	900,000	270,000	1,170,000
総　計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学、各国文学・文学論
キーワード：モンゴル文学、モンゴル近代文学、モンゴル系諸民族、モンゴル国、内モンゴル、ブリヤート、カルムイク

１．研究開始当初の背景

ある文学作品の帰属をどう決めるのかは非常に難しい問題である。土地による分類なのか、言語によるものなのか、それとも民族によるものなのかは時と場所によって一様ではない。カフカはユダヤ人であり、現在のチェコ共和国においてドイツ語で作品を書いた。カフカの作品はドイツ文学に位置づけられるが、もし、他地域においても言語ですべてくくることができるとすれば、在日韓国・朝鮮人の作家が日本語で書く文学は日本文学であるし、アフリカにおいて英語で創作活動をする作家たちの作品は英文学ということになる。

モンゴル国においてモンゴル文学といった場合、国境を超えて他の地域でモンゴル系の作家がモンゴル語で発表した作品もその視野に入るが、ロシアに居住するモンゴル系諸民族の文学史からはモンゴル国の文学が排除されている。中国のモンゴル人たちは自分たちの領域のみの文学史を作っており、モンゴル国における文学史との関係は政治体制と歴史観の相違などから共通の基盤を築くにはいたっていない。

近代文学とは、国家という領域内に住む読者＝国民を対象とし、読者＝国民にその国家への帰属意識を涵養する一つの装置として成立したとされる。このように近代国家と近代文学はその発展の過程において分かちがたく結びついている。

想像されうる「民族」はしばしば設定した国境を超えて存在することがある。国外からの影響を嫌い、国家の政策によりそれまでの「言語市場」が国境に沿って分断される場合もある。モンゴル、中国、ロシアに分断されたモンゴル系諸民族はこの一つの例である。彼らは社会主義という同じイデオロギーの中でお互いに交流を持ちながらも、帰属する国家ごとに独自の近代文学を成立させた。このモンゴル系諸民族の文学の成立の独自性から、文学と国家、文学と民族の諸相が見出せると考える。

同様に、国境の域内で近代文学が成立したとすれば、国境が内と外という想像性を文学に付与したと考えられる。それら個々の文学に現れた「他者」あるいは「同胞」としての国境を超えて暮らす人びとに関しても同時に研究する必要があろう。

本研究に取り組む研究代表者の岡田と研究分担者の芝山は、1999 年に設立された日本モンゴル文学会の当初からのメンバーであり、本学会を通じて集まった研究者の協力により、2003 年に『モンゴル文学への誘い』（明石書店）の編集・刊行に携わった（本書は 2013 年に同書店からオンデマンド版として再刊された）。また、研究分担者の荒井は 2001 年より本学会に参加し、主としてロシアのモンゴル系諸民族の文学的状況に関して研究を行ってきた。本学会の活動を通じ、モンゴル国や内モンゴルなどの諸地域からやってきた文学研究者と日本の文学研究者が議論する中で、モンゴル文学を語る視点について交わされた議論が本研究に結びついている。

２．研究の目的

(1) 本研究の目的は近代文学と近代国家の関係の再検討である。一般に近代文学の成立は近代国家の建設と密接な関係にあるといわれる。しかし、隣接する地域が同系統の民族であり、近代国家成立以前においては同じ「言語市場」を形成していたとするなら、その分断はどう影響するのか。本研究ではモンゴル国、中国内モンゴル自治区、ロシア連邦ブリヤート共和国およびカルムイク共和国という、隣接するモンゴル系諸民族が居住する国と地域を中心に近代文学の成立過程、国家により形成された個別性、国境を超えた共通性、さらに文学作品や人的交流による相互影響を再検討し、モンゴル近代文学研究に新たな視点を提供しようとするものである。

(2) 本研究の目的の独創的な点は、20 世紀に入り国家単位で編成された文学の独自性が強調され、同系民族を横断する文学が無視されている状況に鑑み、国境を超えて同系民族の文学の比較・統合を試み、新たな視点を提供しようとする点にある。蛸壺的な文学編成が国家単位で細分化される状況を再検討する視点を持ちえるのは、その外側に立つものだけである。さらに、モンゴル国、内モンゴル、ブリヤート、カルムイクの文学研究者が存在し、それぞれの枠を超えて議論ができる地域は、地理的にモンゴルに近く、モンゴル研究の盛んな日本しか存在しない。そのような好条件を生かし、モンゴル文学研究、ひいては世界文学に貢献する議論を作り出そうという点も、本研究の目的の独創的な点といえよう。

３．研究の方法

本研究では、「国境と跨境が取り結ぶ文学の可能性」を研究する第一段階として、三年間の研究期間内に以下の課題に取り組んだ。

(1) 一年目はまず、各地域の文学史を整理する。次に時代区分（1920-40 年代、1940-60 年代、1960-80 年代、1990 年代以降）を設定し、その中でどのような交流が行われたかを整理する。その上で、各時代区分で特徴的な交流を取り上げて検討した。その成果について 2010 年度のモンゴル文学会秋期研究発表会にてワークショップを開催し、さらに深く議論すべきテーマの選定を試みた。

(2) 二年目は、この議論に基づき、2011 年 8 月にモンゴル国ウランバートル市で開催された第 10 回国際モンゴル学者会議直後に、「モンゴル系諸民族の近代文学――越境の視点から」をテーマとしたシンポジウムを開催する。国際モンゴル学者会議に参加するため各国から集まったモンゴル文学研究者に本シンポジウムへの出席を求め、本研究の意義を説明するとともに、彼らの意見を広く取り入れることを目標とした。このシンポジウムの成果と課題は 2011 年度のモンゴル文学会秋期

研究発表会にて討議した。

(3) 三年目に、上記のワークショップとシンポジウムをもとに、本研究に取り組む三人、および国内外の研究協力者も含めて、2012 年秋を目処に論文を提出する。部分的には 2012 年度のモンゴル文学会秋期研究発表会にて発表の上、議論を行い、2012 年度内に岡田、芝山連名で刊行することを目指ざした。

４．研究成果

(1) 2010（平成22）年度は、研究課題遂行の第一段階として、まず、モンゴル系諸民族の居住するモンゴル国、中国内モンゴル自治区、ロシア連邦ブリヤート共和国およびカルムイク共和国などの各地域の近代文学の成立過程、国家により形成された個別性、国境を越えた共通性、さらに文学作品や人的交流による相互影響について整理・検討する作業に着手した。そのため、研究代表者の岡田と研究分担者の芝山・荒井は、日本における文献に基づく調査研究のみならず、夏期休暇中に各地域で実地に調査研究を行った。それらの成果の一部は、

岡田「D.マンダフ著『日本文学のモンゴル語訳の経験といくつかの新しい問題』における「モンゴル文学の日本語訳概観」の章について」
芝山「内モンゴル師範大学朝魯門教授の《世紀を跨ぐモンゴル文学の新傾向》とモンゴル文学史再検討」
芝山「モンゴル国文学からモンゴル文学へ：日本におけるモンゴル文学研究と『モンゴル文学』誌創刊の意義」

などの研究発表の形式で、春と秋に開催された日本モンゴル文学会の定例研究会に提出され、研究課題をめぐって活発な議論と意見交換が行われた。成果の一部はまた『モンゴル文学』誌創刊号に、

荒井「ヨーロッパ亡命カルムイク知識人エレンジェン・ハラ=ダワーン著　『軍指揮官としてのチンギス・ハン』の日本語訳について」
芝山「モンゴル文学の世界性―『モンゴル文学』創刊によせて」、
チョルモン「世紀を跨ぐモンゴル文学の新傾向」
ダムディンスレン（岡田訳）「遅れたばあさん訪ねある記」）

など、論文、評論、翻訳の形式で掲載された。また秋の研究会に招聘した内モンゴル師範大学の満全（ドルノテンゲル）教授の講演「内モンゴル近代文学に関する諸問題」も、内モンゴルの近代文学の現状と問題点を論じたものであり、私たちの研究課題の遂行にとってたいへん有意義なものであった。

(2) 2011（平成23）年度は、研究課題遂行の第二段階として、モンゴル国ウランバートル市で8月9-12日に開催された第10回国際モンゴル学者会議に合わせて、8月15日に国際シンポジウム「モンゴル系諸民族の近代文学――越境の観点から」を主催した。モンゴル学者会議直後だったこともあり、モンゴル国からD.ツェデブ、D.ガルバータル、S.バイガルサイハン、G.ガルバヤル、中国からチョルモン、ワンマンドガ、ロシアからM.P.ペトロワなど有力なモンゴル文学研究者が参加して研究発表を行ったほか、研究代表者の岡田と研究分担者の芝山と荒井も、

岡田「モンゴル〔近代〕文学の時代区分の問題について」
芝山「モンゴル国における読書傾向と越境モンゴル文学の可能性」
荒井「ブリヤートとカルムイクの近代文学史について」

を発表した。シンポジウムでは、多数のモンゴル人出席者を交えて活発な議論と意見交換が行われ、標記研究課題をめぐって大きな成果を上げることができた。またシンポジウムに先立って開催された第10回国際モンゴル学者会議でも、

岡田「ツェンディーン・ダムディンスレンと社会主義的近代化」
芝山「The Re-birth of “Mongolian Literature” : 100 Years after Asia's First Modern Revolution」
荒井「チンギス・ハンに関するある本の歴史――ユーゴスラビアで出版された本の日本語訳」

の発表を行い、研究課題に関連する意見交換を行った。なお、岡田の上記二件の発表は後にモンゴル科学アカデミー言語文学研究所紀要『言語文学研究』とモンゴル国立教育大学モンゴル研究院紀要『モンゴル研究フォーラム』に掲載された。以上の二つの会議のほか、日本モンゴル文学会の春と秋の定例研究会でも、

岡田「モンゴル文学と戦争――集英社創業85周年企画『戦争×文学』に寄せて」
芝山「2010年の予備調査にみるモンゴル人の読書傾向」
芝山「東アジアにおける『文学』概念の本質化――国際モンゴル学者会議の論争から」

など研究課題に関連する発表があり、活発な討論が

行われた。

(3) 2012（平成23）年度は、研究課題遂行の第三段階（最終段階）として、日本モンゴル文学会が昨年度8月15日、モンゴル国ウランバートル市で開催した国際シンポジウム「モンゴル系諸民族の近代文学——越境の観点から」に参加した内外の研究者（モンゴル国、中国、ロシア、日本）から提出された発表論文をまとめ、研究報告書の形式で刊行することを目指していたが、編集作業の遅れや資金面その他、諸般の事情から年度内の刊行が困難となったことは遺憾である。研究代表者の岡田は本年度8月と3月、モンゴル国ウランバートル市で開催された国際学会（「モンゴル研究—その新しい傾向」「モンゴル文献学の当面する諸問題」）に出席し、研究課題に関連する発表を行った。研究分担者の芝山は、内モンゴルで現地調査を行う予定であったが、日中関係悪化が内モンゴルのホストに影響することへの配慮から現地調査を自粛し、内モンゴル社会科学院で12月に開催された国際学会への論文参加のみにとどめた。研究分担者の荒井は5月と9月、アメリカとインドで開催された国際学会（“Conference on Language and Identity in Central Asia”, “4th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies”）に出席し、研究課題に関連する発表を行った。国内では7月に開催された「日本国際文化学会第11回全国大会」に岡田と芝山が出席し、研究課題に関連する発表を行った。また日本モンゴル文学会の春と秋の定例研究会でも、

岡田「モンゴル国立大学創立70周年記念国際学術会議《モンゴル研究—その新しい傾向》参加報告」
芝山「モンゴル文学における読者論の可能性」
芝山「《狼の原理》再考」
荒井「ブリヤート語書籍出版について」

など研究課題に関連する発表があり、活発な討論が行われた。

(4) 以上の研究成果には次のような意義が認められよう。
① モンゴル系諸民族の近代文学研究に新たな視点を提示し、同時にそれぞれの文学史にロシア文学、中国文学の流れ以外の大きな文脈を与えたことである。逆に、モンゴル国においても隣接地域の同胞の文学が自分たちの文学にとって持つ意味合いを考えるきっかけになったはずである。

② 国際シンポジウム「モンゴル系諸民族の近代文学——越境の観点から」を開催することで、参加したさまざまな国のモンゴル系諸民族の文学研究者に統合的なモンゴル文学の視点を発信し、彼らからのフィードバックを得ることによって、世界的な議論と研究のネットワークを構築する端緒が築かれたことである。

③ 日本モンゴル文学会は2010年春より『モンゴル文学』（編集責任者：岡田・芝山、編集委員：荒井）という雑誌の刊行を開始した。本誌は日本語、モンゴル語、英語での研究発表の場を提供することを目標としているが、これらの言語で編み出される最新のモンゴル文学研究の議論を実り多くするための起爆剤となることが期待される。

④ 最後に、これらの地域における「近代文学」の内容および文学観、また文学史の編纂を追うことにより、近代国家における文学に与えられた役割、21世紀現在の日本に住む私たちが考えるような意味での「近代文学」が、いかに近代国家という枠組みの中で成立したかが明らかになりつつある。現在においては、いわば世界の辺境地域の文学としての自覚をもちつつ活動しているこれら三地域の作家たちの、新たなる取り組みを検討することは、まさに、世界文学の中で一定の位置を占めているわれわれ日本文学の在り方への批判的再検討を促すことにもなるだろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計8件）
①二木博史・岡田和行、国際学術会議「モンゴル研究—その新しい傾向」、『日本モンゴル学会紀要』、査読無、2013年、第43号、56-59頁。
②エルデンハダ（岡田和行訳）、モンゴル人の伝統的文学理論の整理と研究、『日本とモンゴル』、査読無、第42巻第2号（通125号）、2012年、115-123頁。
③岡田和行、モンゴル近代文学と戦争（モンゴル語）、『ACTA MONGOLICA（モンゴル国立大学モンゴル研究所紀要）』、査読無、第12巻（通383巻）、2012年、195-199頁。
④岡田和行、モンゴル〔近代〕文学の時代区分の問題について（モンゴル語）、『Mongol Sudlalyn Chuulgan（モンゴル国立教育大学モンゴル研究院紀要）』、査読無、第11巻（通46巻）、2011年、150-163頁。
⑤岡田和行、ツェンディーン・ダムディンスレン

と社会主義的近代化（モンゴル語）、『Khel Zokhiol Sudlal（モンゴル科学アカデミー言語文学研究所紀要）』、査読無、第4巻（通36巻）、2011年、122-125頁。

⑥岡田和行、ツェンディーン・ダムディンスレンと「知識人の迷妄」をめぐって（モンゴル語）、『Khel Zokhiol Sudlal（モンゴル科学アカデミー言語文学研究所紀要）』、査読無、第3巻（通35巻）、2010年、179-190頁。

⑦芝山豊、モンゴル文学の世界性—『モンゴル文学』創刊によせて、『モンゴル文学』、査読無、第1号、2010年、8-12頁。

⑧荒井幸康、ヨーロッパ亡命カルムイク知識人エレンジェン・ハラ=ダワーン著『軍指揮官としてのチンギス・ハン』の日本語訳について、『モンゴル文学』、査読無、第1号、2010年、25-44頁。

〔学会発表〕（計29件）

①岡田和行、Ts.ダムディンスレンの書き残したある伝言について（モンゴル語）、国際学術会議「モンゴル文献学の当面する諸問題」、2013年3月23日、モンゴル・日本センター（モンゴル国ウランバートル市）。

②芝山豊、幻の狼と現代モンゴルの危機—井上靖と姜戎の狼をめぐって、The China Third International Symposium on Mongolian Studies、2012年12月12日、内モンゴル社会科学院（中国内モンゴル自治区フフホト市）。

③荒井幸康、ブリヤート書籍出版について、日本モンゴル文学会秋期研究発表会、2012年12月1日、大阪外国語大学記念会館。

④荒井幸康、The Language Policy of Kalmykia in 1990s - Search of New Identity after Collapse of Soviet Union、4th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies、2012年9月4日、Maulana Abul Kalam Azad Institute of Asian Studies（インド共和国コルカタ市）。

⑤岡田和行、モンゴル近代文学と戦争（モンゴル語）、国際学術会議「モンゴル研究—その新しい傾向」、2012年8月16日、モンゴル・日本センター（モンゴル国ウランバートル市）。

⑥岡田和行、日本におけるモンゴル文学研究、日本国際文化学会第11回全国大会、2012年7月8日、青山学院大学青山キャンパス総研ビル。

⑦芝山豊、モンゴル語世界の司馬遼太郎と村上春樹、日本国際文化学会第11回全国大会、2012年7月8日、青山学院大学青山キャンパス総研ビル。

⑧芝山豊、モンゴル文学における読者論の可能性、日本モンゴル文学会春期研究発表会、2012年6月23日、東京外国語大学本郷サテライト。

⑨荒井幸康、Formation of Literal Languages and Identity - In Case of Mongolic Languages, Mongolian, Buryat and Kalmyk、Conference on Language and Identity in Central Asia、2012年5月5日、カリフォルニア大学ロサンジェルス校。

⑩芝山豊、東アジアにおける「文学」概念の本質化—国際モンゴル学者会議の論争から、日本モンゴル文学会秋期研究発表会、2011年11月26日、大阪外国語大学記念会館。

⑪荒井幸康、20世紀におけるモンゴル系諸民族の文字改革について（モンゴル語）、第4回ウランバートル国際シンポジウム「20世紀におけるモンゴル諸族の歴史と文化」、2011年8月17日、モンゴル・日本センター（モンゴル国ウランバートル市）。

⑫岡田和行、モンゴル〔近代〕文学の時代区分の問題について（モンゴル語）、国際シンポジウム「モンゴル系諸民族の近代文学—越境の観点から」、2011年8月15日、モンゴル国立大学（モンゴル国ウランバートル市）。

⑬芝山豊、モンゴル国における読書傾向と越境モンゴル文学の可能性（モンゴル語）、国際シンポジウム「モンゴル系諸民族の近代文学—越境の観点から」、2011年8月15日、モンゴル国立大学（モンゴル国ウランバートル市）。

⑭荒井幸康、ブリヤートとカルムイクの近代文学史について（モンゴル語）、国際シンポジウム「モンゴル系諸民族の近代文学—越境の観点から」、2011年8月15日、モンゴル国立大学（モンゴル国ウランバートル市）。

⑮芝山豊、The Re-birth of "Mongolian Literature": 100 Years after Asia's First Modern Revolution、第10回国際モンゴル学者会議、2011年8月11日、モンゴル国立大学（モンゴル国ウランバートル市）。

⑯荒井幸康、チンギス・ハンに関するある本の歴史—ユーゴスラビアで出版された本の日本語訳（モンゴル語）、第10回国際モンゴル学者会議、2011年8月11日、モンゴル国立大学（モンゴル国ウランバートル市）。

⑰岡田和行、ツェンディーン・ダムディンスレンと社会主義的近代化（モンゴル語）、第10回国際モンゴル学者会議、2011年8月10日、モンゴル国立大学（モンゴル国ウランバートル市）。

⑱岡田和行、D.マンダフ著『日本文学のモンゴル語訳の経験といくつかの新しい問題』における「モンゴル文学の日本語訳概観」の章について、日本モンゴル文学会秋期研究発表会、2010年11月27日、大阪外国語大学記念会館。

⑲岡田和行、日本におけるモンゴル近代文学研究について（モンゴル語）、国際シンポジウム「日本・モンゴルの過去と現在—20世紀を中心に」、2010年9月10日、モンゴル・日本センター（モンゴル国ウランバートル市）。

⑳芝山豊、内モンゴル師範大学朝魯門教授の《世紀を跨ぐモンゴル文学の新傾向》とモンゴル文

学史再検討、日本モンゴル文学会春期研究発表会、2010 年 6 月 5 日、東京外国語大学本郷サテライト。
（以上のほか 9 件の学会発表があった。）

〔その他〕
ホームページ等
http://www007.upp.so-net.ne.jp/mongolbungaku/

６．研究組織
(1) 研究代表者
岡田　和行（OKADA KAZUYUKI）
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号：70143617
(2) 研究分担者
芝山　豊（SHIBAYAMA YUTAKA）
清泉女学院大学・人間学部・教授
研究者番号：20320947
荒井　幸康（ARAI YUKIYASU）
北海道大学・スラブ研究センター・COE 共同研究員
研究者番号：80419202